

婦人のための情報誌

3号

なとわあく



目次

シンポジウム・レポート	2
特集「これからの家族を考える」	4
ティータム	9
行政情報・県労働部	10
わたしたちのまち・トップインタビュー	11
はじめまして・グループ情報	12
海外スポーツ・西ドイツにいらして	14
こだま・読者の声	15
本の紹介	15
編集員の紹介	16



静岡県

化と からの家族を考える

58.7.20 450名の参加者を得て静岡市で開かれました

女性の生活の変 これ

パネルディスカッション

テーマ／女性の生活の変化とこれからの家族を考える

- パネリスト 目黒依子（上智大学教授）
志田直正（静岡女子大助教授）
山田 侃（静岡家庭裁判所調査官）
佐藤和子（コーディネーター）

目黒依子 女性の生活の変化とこれからの家族を考える。女性にとって家族の持つ意味が変化してきたように、男性の側が変わっていかないことが一つの問題です。また、母親が自分の生き方を肯定的に見られないという場合には、子どもに良いモデルを示すことができなく、悪い影響を与えてしまっている例があります。すこし飛躍に聞こえるかもしれませんが、最近の女子非行の増加は、こんなところにも原因があるような気がします。

◆志田直正・教育水準が上がり、考え方も合理的になってきた女性の関心が、だんだん外に向けられるようになり、個人主義になってゆくのは自然のなりゆきで、子育てや老親の世話など、これまで家庭内でまかなわれていたものが、社会的サービスにたよるようになってきたことも、逆に、家庭の崩壊を促進しています。

しかし、社会的弱者にとって、「家族」は他にかけがえない生活の場であり、人間にとって真の生活の充実、幸福を考えると、できる範囲で、外に出してしまった機能を家族に取り戻すことを考える必要があるのではないのでしょうか。

◆佐藤和子・女性の自立との関連でお話しいただけますでしょうか。

基調講演

女性の自立と現代家族の課題

上智大学教授・目黒依子

目黒教授は、家族の本質とは何なのかという点について、歴史的視点・国際比較の視点から述べ、家族の変化は、社会の産業化と不可分の関係にある、と説明しました。講演の要旨は次のとおりです。

かつては、家族は人間が生きる

今、なぜ、「家族」か

現在、様々な角度から女性と家族の変貌が指摘されていますが、婦人の問題を考える場合、その議論の出発点として、「家族と社会のあり方」に対する国民的コンセンサスの必要性を感じざるを得ません。

そこで、本年度、静岡県では、「家族」を統一テーマに、シンポジウム、調査、啓発誌の発行等を通じてひとりでも多くの方に、現代家族がかかえている諸問題を考えていただき、議論の輪を広げていただきたいと思います。

のに必要なすべての機能を提供し、従って個人は家族なしには生きられませんでした。

しかし、社会全体が豊かになった現在、いろいろな機能集団が発達し、人間は、個人でも生きられるようになりました。

同時に、人間疎外が進むなかで、人間を個性ある存在として認め合うほとんど唯一の存在として、現代ほど「家族」が人間の回復の場として求められている時代はありません。

ただ、女性の生活も、社会も、大きく変化してきた現代にあつて単に血縁や永続性といった形式に



◆目黒依子・自立の問題は男女を問いません。日本の夫婦でうまくいっているカップルは、お互いがはつきり違った役割を分担している、相手にないものを補完し合っている場合が多いことから考えても、男性も十分に自立しているとは言えないと思います。

経済的自立は、それだけでは十分でないしろ、自立に必要な条件であることは確かです。

◆佐藤和子・失なわれつつある家族の機能を取り戻すという点につ

こだわった家族である必要はない、と私は考えています。

過渡的な混乱は伴うかもしれませんが、これからの女性は、緊張葛藤・対立を甘んじて受ける覚悟で、「自立した個人と個人との親密な関係のある家族」を旨とすべきだと思います。それが女性の自立につながるでしょう。

パネルディスカッション

前半の目黒教授の講演をうけて「女性の生活の変化とこれからの家族を考える」をテーマに、約一時間四十分にあつて活発な議論が行われました。各講師の発言の要旨は次のとおりです。

◆佐藤和子（コーディネーター）
家族は、私たちが日々本音で生きている場です。論理だけでは割り切れない現実が多くあり、悩みとなっていきます。家族と女性の自立について、日常生活の具体的な場を考えてゆく場合の手がかりとなるようなお話をいただきたいと思っています。

◆山田 侃・家庭裁判所であつた経験の範囲ですが、子育てもマイホーム建設も一応終え、ホッとした状態の結婚歴十数年と

いて、もうすこし進めていただきます。

◆目黒依子・生活の場としての家族を、再度ぬくもりのあるもの、という考えは現実的であり、多くの人に受け入れられると思います。ただこの場合、家族の機能を固定的に考えないで、それぞれの家族の選択に任せることが大切だろうと考えます。

周りにある社会的な制度を利用する知識を持つことも必要です。私が講演で述べた家族の姿は理想ではありますが、現実には、ごたごたもやましたものがあるのが家庭生活です。

そして、家族は弱者のためにありつづけてきました。今、女性が弱者でなくなつたとしたら、今度は、女性が他の弱者のために尽くすことが、自らの生活の充実につながらないでしょうか。

シンポジウムに参加して

家族や自立の意義を歴史的視点からとらえた講演には、大変感銘をうけました。パネルディスカッションでは、人間性回復（ぬくもり）の場としての家族のあり方について、もっと具体的な方策を話し合つてほしかったと思います。

編集員（夏目智子）

これからの家族を考える

家族のあり方は、女性の「生き方」と深くかかわっています

変化しつつある家族

人類の歴史とともに家族は存在しつづけており、世界中どこでも人々は家庭生活を営んでいます。少しも変化しないように見える家族も、実は、時代とともにその機能や形態を大きく変えています。かつて、人々は祖先の残してくれた家業や家産を頼りに生きざるを得ませんでしたから、これを守り子孫に残していくために家族の結束が必要でした。個人の自由や自己実現への欲求は抑制されなければなりません。家父長制の「イエ」がその時代の家族の形でした。工業化社会になると、多くの人



「家族」は現代のキーワード
たくさんの家族論が出版されている

々は祖先からの家業や家産に頼らなくても個人の能力によって生活できるようになりました。『両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本』とする家族が理想とされ、かくして、『夫は外で仕事・妻は家で家事・育児』という現代の核家族が誕生しました。

現代家族の課題

しかし、いま、家族生活を維持することを困難にするようなさまざまな現象が目立つようになっています。

第一は、子育て機能の低下ということです。家業や家産を継承し

ない核家族では子育ての目標を失いがちですし、親から子、子から孫へと伝えられる子育ての知恵も伝わりにくくなっています。

第二は、女性の生活や意識の変化です。夫や子どものためだけにつくすという人生ではなく、一人の人間として自己実現をめざす女性が増えています。『夫は外で仕事・妻は家で家事・育児』という関係は根底のところてゆるぎだしています。

第三は、老後の生活の不安定化です。子どもたちが巣立った後の老人のみの家族は、病氣、孤独、経済的弱さという三大苦と単独で直面しなければならなくなっています。

女性の生活の変化と家族

近年の女性をとりまく生活環境の変化は、『主婦』以外の多様な生き方を可能にしています。

従来、家族の機能を一手に引き受けてきた女性の生活の変化は家族のあり方を根本的に問い直すことを必要としています。

現代の家族のかかえている子育てや老親の扶養・介護の問題等を通して、新しい家族のあり方をみなさんといっしょに考えてみたいと思います。

セクショナル
子育て

子どもの誕生は、どの家庭にとっても最も感動的な出来事です。そして、それに続く子育てこそ家族の歴史をつくりまします。

家族問題からみた子育てについて、白尾敬子編集員にレポートしてもらいました。

戦前までの日本は、大家族制の中で、親子関係を中心に生活が展開されてきました。欧米が個人主義を前提とした文化であるとするれば、日本は家族主義の文化とすることが出来ます。

かつては、子どもたちはたくさん兄弟姉妹、おじおば、祖父祖母の中で、兄が弟の世話をしたりして大きくなり、子育ての知恵もごく自然のうちに継承されていきました。

しかし、現代の家族は、出生率の低下と核家族化の進行によって一世帯当りの人数が平均3.25人（昭和57年厚生行政基礎調査）へと小さくなり続け、母親は、多くの場合たったひとり、初めて子育てを経験することになりました。

戦前の女性のように一生を子育ての中で過ごし、末子が成人しない内に死んでゆくのが普通であった時代とは大きく変わり、今は、

子どもを生んでも働き続ける場合や、末子の就学を機に働きに出る母親が多くなりました。

母親の就労と子どもの非行等の関係はよく言われる問題です。日本の母子関係は、この世で最も堅い絆で結ばれた間柄であると言われてきました。それだけに、過度とも言えるほど密着していた母子関係が、突然の母親の就労などで変化した場合、子どもたちは影響を受けざるをえません。

しかし、現に35才〜54才の中高年層では、61.8%の主婦が就労している現在、(昭和57年就業構造基本調査)働きに出ること自体を批判している段階ではなく、問われるべきは、母親自身の「働く姿勢」であり、出る前の段階での体制の整え方ではないでしょうか。

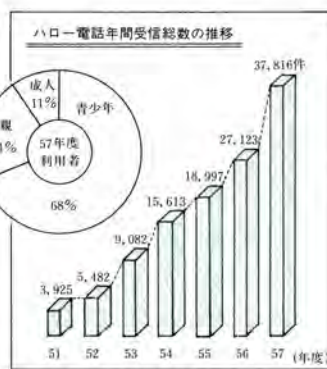
母親の問題と表裏の関係にある

のが父親のあり方です。言うまでもなく、両親は子どもにとって最も身近な大人のモデルですが、特にサラリーマン家庭では、子どもたちが父親とふれ合う時間はごくわずかであり、父親はますます存在の稀薄なものとなってしまっています。

他方、学齢期の子どもたちは、多かれ少なかれ、受験競争の波にもまれ、子どもたち自身も少なからぬ挫折や苦悩を味わっています。

このように、現代の家族は、昔であったら意識しなくても自然に備わっていた子育ての能力が、いろいろな原因から低下してしまっており、望ましい子育ては家族だけではできなくなっています。

子育ては、それぞれの家庭のごく個人的な問題であると同時に、次代を育てるとい意味では、最も大切な社会全体の課題でもあります。これだけ女性の生活も、社会経済の構造も変化してきている以上、子育ての問題には、社会全体がもっと関心を寄せなくてはと思います。そして、最も身近な地域の課題として、「子育ての社会化」についても真剣に考え、そこから新しい家族関係をたてなおすべき時代に入ってきているのではないかと感じられてなりません。



資料出所「静岡県教育相談センター」

へ一言インタビュー



ポプラの子
児童保育
池田たつきさん

小学校一年から三年までの児童がいますが、ここでは基本的なしつけの指導に力を入れています。最近の親は、自分さえ良ければ、という人が多く、他人を思いやる気持ちに欠けるように思います。それが子どもたちにも反映しています。

小さいうちに厳しくしつけ、家族の間で何でも話し合える雰囲気をつくっておくことが、その後の親子関係を決定づけるのではないのでしょうか。



ハロー電話
丸山廣三さん

40人のカウンセラーや職員が、ひっきりなしにかかってくる電話の相談にのっていますが、結論を急ぐのではなく、聞いてもらいたいという相談者の気持ちを大切にして接しています。

最近では、問題を抱えている本人からの相談が多くなっています。

相談者の家庭状況では、過保護や厳格すぎる家庭に多くなっています。親は常に子どもの立場に立って考え心を開かせることが大切です。